まちづくりひろしま

第４４号（令和元年１１月１５日）
読者数：６４８名（募集中）
ﾒｰﾙ：hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp
〒733-0002　広島市西区楠木町 1-9-7
発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二
配信元：広島アイデアコンペ実行委員会
ご提案・ご意見等は、こちらまで

被爆１００年(西暦2045年)の姿をめざして

□ 巻頭言

姉との会話

新広島設計代表　錦織亮雄

姉は女学校二年生の時、広島市雑魚場町で建物疎開作業中に被爆し、体前面と顔に深いやけどを負って死にました。以下はその姉との夢の中の会話です。

『あれから 74 年、私は今年米寿ですよ。女学生の米寿・・。ピカに遭った人はもうほとんどこちらに来ましたよ。みんなで広島のことを心配していますよ。広島のことはあの日からずっと見てましたよ。焼け野原で必死に生きたみんなのことは知っていますよ。日本のことも世界のことも見てますよ』

――広島のことを見ていて何か気になることがありますか？――

『前からずっと気になっているのは「平和記念都市建設法」、特に「平和記念」という言葉と「建設」という言葉ですね。平和記念という言葉はなんだか祝祭的な響きがあるわね。それに、あの原爆の惨劇は広島という場所で原子爆弾と広島の住民（被爆者）が繰り広げた惨劇なのにあの法律には原爆の「げ」の字も、被爆者の「ひ」の字も出てきませんね。広島という都市のことだけですね。都市のハードだけの法律だから「建設」になってるのね。法律の内容は「理想の平和都市を作るから土地とお金を優先的にください」ということでしょ。それなのに法律の目的に「恒久の平和を誠実に実現しようとする理想の象徴」などというから、小さな器に大きなものを盛り付けた料理みたいになってるね。理想の象徴って何だろうね。なんだか気持ちの悪い法律ですね、法律を起草した人は「広島平和都市法」にしたかったなんて言ってるでしょ。それなら初めからそうすればよかったんじゃないの。それに、いろんな人が平気で「記念」と「建設」を省略して「広島平和都市法」と言うのはある種の歴史捏造じゃないかしら。』

――原子爆弾で世界大戦が終わったというのは、広島の肯定的意味づけとしては大きかったのですよ。昭和 22 年の初めての平和宣言で浜井市長は「原子力をもって争う世界戦争は人類の破滅と文明の終末を意味するという真実を世界の人々に明白に認識せしめた。これこそ絶対平和の創造であり、新らしい人生と世界の誕生を物語るものでなくてはならない。」と宣言していますから人類の祝祭の意味を持った平和記念都市ということだったと思いますよ。それに、絶対平和の創造や理想の平和都市の創出こそが惨めに死んだ姉さんたちの「死に甲斐」だと信じたんですよ。死んでいった人の「死に甲斐」というのは生き残った者の「生き甲斐」でもあったんです。あの頃は生き残った者はあまりにも多くの惨めな死者を目にして、自分たちは死に損ないの罪人のように思っていましたからね。――

『なんとか「死に甲斐」を作ろうとしたのは原子爆弾投下有用論の意味づけですね、平和のための殺戮ということね、占領下だったから占領軍の意向も重きをなしてたのね。理想の平和都市を作るのが生き残った人たちの生き甲斐だったのならそれでもいいのよ。たしかに、戦後復興期の広島には独特の活気があったわね。広島に「平和」と名のつくものがいっぱい出来たのも悪くはないのよ。だけど、死んだ者の「死に甲斐」なんて「犬死に」でいいのよ。原爆で平和なんてこなかったじゃないの。核兵器開発競争が始まっただけでしょ。唯祈ってほしいだけなのよ。姉さんたちはもう生き物ではないんだから「死に甲斐」も「犬死に」もありませんよ。』

――たしかに、あれから 74 年も経って、絶対平和なんかどこにもないし、理想の平和都市も

創出されたとは言えませんね。平和の意味も変化していますし、核兵器の威力も精度も上がってしまって、あの法律で自分に使命を課している広島は被爆者の思いを背負って常に核廃絶や平和行動の先頭に立たねばならないので、今の日本では孤立してる様相さえあります。最近では、広島は「被爆体験を通じ平和の尊さを体現するまち」を目指すことにしています。被爆の実相の継承と称して「原爆博物館」に向かっているように思いますね。――

『はじめは世界に平和をもたらした平和記念都市だったのに、今では「記念」を拡大解釈して「平和のことを思い起こす都市」になったのね。原子爆弾は残酷だったと思うけど、こちらには東京大空襲で焼夷弾に焼かれた人や沖縄で火炎放射器に焼かれた人もいて、原爆の個人に対する残酷さなど主張できませんよ。核兵器開発の人類としての大きな罪悪に切り込むべきですよ。今では核兵器も広島の何千倍の威力のものがあって、ロシアのＲＳ－28はフランスを一発で壊滅させる威力というじゃないですか。核廃絶は平和の条件ではなくて結果と言うことですね。』

――被爆の実相の継承も大切ですが、被爆都市や被爆者という特殊性を超えて平和構築の新しい知恵が生まれなければならない時代ですね。いずれにしても、数量的価値の支配や、それ故の成長至上主義や覇権主義から脱出する哲学を共有することが必要です。結局それが「平和を誠実に実現しようとする理想」ということですね。僕もわずかに残された被爆者として最後の死力を尽くしたいと思うよ。じゃ、姉さんまた夢で語りましょう。――

ひろしまのまちづくりの動き

① 浅野氏広島城入城４００年記念の各種事業実施！

安芸西国街道の大名行列

今年は浅野長晟が広島城に入城して 400 年目に当たり、様々なイベントが開催され、現在も進行中である。

浅野氏は 12 代約 250 年にわたり広島城主を務め、大規模な干拓や茶道などの文化の育成や商工業の発展などを通して国内有数の都市を作り上げ、今の広島の礎を作った。

浅野氏ゆかりのスポット、広島城、縮景園、広島県立美術館などで、江戸時代の広島のまちの暮らしや伝統文化などを披露。

ここで主なものをピックアップして紹介する。

・広島県立美術館では、書画・武具・能道具・茶道具・婚礼調度など浅野家の至宝を展示
・頼山陽史跡資料館では、藩の文教施策に大きな足跡を残した頼春水を中心に広島藩の学問と文化の概要を紹介
・縮景園では、上田宗箇流の秋風茶会や邦楽鑑賞会、日本庭園の講演会など
・広島城では、浅野家の城と陣屋を紹介。また、藩内各所を描いた絵図などを展示
・9 月 15 日、市民が町人や武士に扮して本通り商店街など広島市中心部を練り歩く時代行列。最後は広島城本丸に入城後、記念式典。10 月 6 日も海田市付近の旧西国街道を大名行列。

16 世紀後半の毛利輝元による広島城の築城以来、福島氏、浅野氏、近代へと継承された伝統と文化を再認識するよい機会となった。

② 広島・長崎爆心地中間点で被爆樹記念植樹！

9 月 21 日、国連が定める国際平和デーに広島市と長崎市の爆心地の中間点に位置する福岡県上毛(こうげ)町で、両市から持ち寄った被爆樹木の苗木を記念植樹。

来年が広島東南ロータリークラブ（広島市）創立 60 周年記念事業として建築家の錦織亮雄氏が企画し、上毛町に提案して町の「未来へつなぐ平和の架け橋事業」として実施。

広島市と長崎市の両市長も参加し、植樹後の記念式典で核兵器の廃絶や世界平和を呼びかけ、上毛町長も「恒久平和の願いを世界に発信する新たな拠点」となることを宣言。

錦織氏も自らの被爆体験を語り、「被爆地を超えて、多くの人に平和を考えるきっかけにして欲しい」という、このアイデアの願いを訴えた。

○ 広島の復興の軌跡・人物編（第１９回）～長岡省吾初代原爆資料館館長

～原爆資料館の基礎を築いた不遇の偉人～

今までは戦後復興そのものの過程で直接的に貢献した関係者を対象としてきたが、今回は広島の復興過程をより広く捉えて、その過程において登場して何かの担い手になった当事者に迫っていくこととする。まず対象人は、今まで脚光を浴びることの少なかったとされる長岡省吾氏、その人である（本文は敬称略）。

１．はじめに．資料館のグランド・リニューアルオープンに当たって

原爆資料館（正式には平和記念資料館であるが可能な限り通称で済ますこととする）が本年４月、２度目の大規模改修を終えて本館を含めて再開館を果たした。資料館の展示・運営に対しては今後様々な検証・見直しが行われるであろうが、いずれにしても原爆資料館が広島にとってなくてはならない役割を担うものであり、欠くことのできない存在であることは大前提であり、さらに望まれる方向性が常に模索されるべきである。

この資料館の創設・開設を進めたのは、当時の広島の総意というわけではなく、極めて特異な形での準備と決意と、意思決定の結果であった。最近相次いで長岡省吾伝記本が出版された。１冊は佐藤真澄「ヒロシマをのこす／平和記念資料館をつくった人・長岡省吾」（汐文社、2018 年７月）であり、もう１冊は、石井光太著「広島を復興させた人びと／原爆」（集英社、2018 年７月）であった。前者（文献１とする）は長岡人生そのものの真実に迫っている。後者（文献２とする）は長岡だけでなく浜井信三、丹下健三、高橋昭博を併せた４名を対象としたものであり、長岡と原爆資料館の物語が全体のバックボーンになっている。

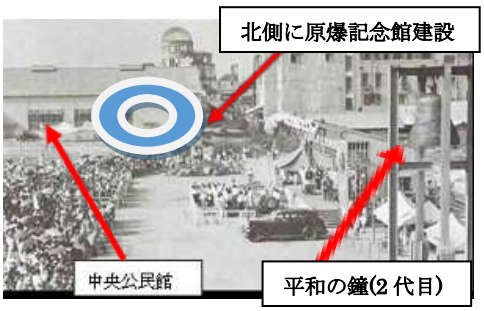
以下、現段階で長岡省吾に迫っていくため、既存資料を利用しての考察としたい。

２．長岡省吾の登場を奇跡的に可能とした過酷な境遇と環境

長岡が被爆の痕跡に注目したのは、原爆が投下された翌々日、すなわち 1945 年８月８日に入市し（文献２では８月８日、文献１では８月７日）、護国神社の石灯籠の土台の表面が泡立ち、刺のようになっているのに触り、見たことからであった。“これは通常の兵器による仕業ではない”、長岡の職業的直観であった。やがて被爆の痕跡を示す資料の収集へと踏み出していく。それは並みの方法ではなく、常識を超えたやりかたで、資料の類型・質を高め、必然的に量を増していく。

しかし、長岡をめぐる環境は過酷さを極めた。周囲の理解は進まず、孤軍奮闘状態であった。長岡の原爆資料への第一歩は、被爆による外見上の変化への興味・関心とされる。学問的にいえば、長岡は理学部の岩石学研究分野での資料収集行為であろう。当時、被爆による変色・異質の瓦は至る所に存在し、とくに珍しくも貴重でもなかった。強いて言えば、より激しく刻印された瓦、より変形した瓦、他の物質と融けあい、結合した姿の特異性、といった注目点でみれば、価値あるものであったろう。

３．空間的な整備状況



長岡の被爆資料の収蔵は、当初、長岡の自宅対応であった。文献１によると“奇妙な拾い屋”として石や瓦などが集められたとき、長岡の妻は「この拾うてきたもん、もううちには置かんといてください。（中略）近所のもんはみんな言うとるんですよ。あのガラクタにはピカドンの毒がついとるゆうて」と懇願したというのである。このように、受け入れ条件は必ずしも整っていなかったのであるが、結局は長岡の強い意思を受け入れられた。後に、長岡の協力者も出現し、長岡後援会が組織され、原爆資料蒐集後援会、原爆資料集成後援会、原爆資料保存会と名称を変えながら長岡の活動の支援も存続した。当初の収集対象の石や瓦だけでなく、つぶれた自転車、溶けて変形したビール瓶、炭化したご飯の入ったアルミの弁当箱等にも拡大収集され、後の原爆資料館の展示にも結び付くこととなったのである。

ついに長岡は広島文理科大学嘱託を辞し、ますます原爆資料の収集に没頭していった。そのとき浜井市長の注目するところとなり、1948 年末、長岡は広島市嘱託職員となった。1949 年７月、基町の市民広場に広島市中央公民館が建設・開設された。長岡は、当初、秘書課付きとして、被爆資料の石ころや瓦などを持ち込んで嫌がられ、市長公室に移動させられても、同じように資料を持ち込まれるので、ついにこの公民館の一室が与えられた。長岡は、早速大量の被爆資料を持ち込み、公民館開設の２か月後の９月、原爆参考資料陳列室の開設ということになった。

ここ市民広場では 1949 年８月、第３回平和祭が挙行され、２代目の平和の鐘が打ち鳴らされた。市民広

場には児童文化会館建設と併せて、軍用地転じて一層市民広場らしき環境を整えていった。1950 年 8 月には、公民館の北側に建物が新築されて、原爆記念館と呼ばれて開館し、資料陳列室から一歩整備が進み、長岡にとって順風状態といえた。

一方、中島公園では平和記念公園コンペにより丹下案が選ばれて、陳列室が予定された。しかし、現実はそれほど単純、順調とはいえなかった。平和記念公園での建物建設は 1951 年 3 月に起工されたが、難渋を極め、幾度も工事中断となった。竣工は 1955 年となり、ようやく 8 月に平和記念資料館として開館し、初代の資料館館長として長岡省吾が就任したのである。しかし資料館が本来の機能として整備されていくまでには多くの難題が降りかかっていく。

1973 年 2 月、長岡の訃報を報じた新聞は、「原爆資料館の生みの親、育ての親、汗の結晶、1700 点死ぬまで収集に執念」の見出しであった。さらに長岡の苦難と挫折をもう少し続編で辿っていきたい。

（編集委員　石丸紀興）

長岡省吾の略歴：1901 年 8 月ハワイ生まれ。父の実家は広島県玖波町。終戦直前まで中国東北部・哈爾浜等で地質調査の業務に携わっていたとされるが、その経歴に封印する意向を持っていたようである。帰国して 1944 年から 1947 年まで広島文理科大学地質学教室に勤務。嘱託で地質学の実地指導。直接被爆していないが、文献１によると翌日から（文献２によると翌々日から）広島市内に入り、被爆の惨状を目の当たりにして地質学者として期するものがあり、以後の人生を大きく規定した（本文において言及）。1955 年完成なった原爆資料館の初代館長、6 年ほどの勤務後退職、1973 年 2 月逝去、享年 71 歳。

□ ほっとコーナー　朗読の魅力

朗読者、Reading Notte 代表　多和田さち子

私は舞台で文学作品を朗読しています。観たことのない方には分かりにくいかもしれませんが、一人芝居に近いようなもの、観客に姿を見せながら小説などを声で表現するもの、と言ったら少しはイメージできるでしょうか。この経験をもとに一般の方に朗読を教えたり、年代を越えた演者たちと勉強会を開いたりしています。

朗読を学び始めて19年、朗読団体を立ち上げて11年経ちましたが、朗読の面白さ、難しさは尽きません。たとえば多くの小説にはセリフと「地の文」があります。

> 「犍陀多（かんだた）は両手を蜘蛛の糸にからみながら、ここへ来てから何年にも出したことのない声で、「しめた。しめた。」と笑いました。」（芥川龍之介「蜘蛛の糸」）

地獄に落ちて何年も出したことのない声で言うセリフ「しめた。しめた。」はどう読めばいいのでしょう。声は出たのか？かすれていたのか？笑った頬は緩んでいたか？引きつっていたか？蜘蛛の糸を掴んだ両手は頭上で力を込めている。・・・様々な条件を声に込めます。

セリフの前後にある「地の文」もただ状況を伝えればいいのではなく、語り手が犍陀多と一緒にほくそ笑む方が面白いのです。登場人物の感情や身体と朗読者の表現がリンクしないと、聴く人には伝わりません。

19世紀イギリスで「舞台朗読」をしていた人物がいます。『クリスマス・キャロル』で知られた作家チャールズ・ディケンズ（1812－1870）がその人です。イギリスやアメリカの舞台で、自作の台本を16年間に500回近くも公開朗読していたそうです。

鹿児島のスタジオにて

この 10 月、ディケンズの作品を鹿児島のスタジオで朗読・録音する機会に恵まれました。鹿児島大学教授の井原慶一郎さんが『ディケンズ朗読小説傑作選』（幻戯書房、ルリユール叢書）を翻訳・出版されることになり、その中の一作「ひいらぎ旅館の下足番」を出版社のサイトで聴けるようにするという企画でした。この作品では下足番の男が、幼い紳士と淑女の駆け落ちという前代未聞の出来事を旅館の客に話して聴かせます。下足番の語りで進みますが、９人の登場人物（7 歳から５、60 代までの男女）のセリフを読み分ける作品で、ディケンズの朗読でも人気が高かったようです。ディケンズの作品は声で表現したときに最も生き生きするように書かれ、井原さんの翻訳はそれを最大限に生かしています。舞台と違って姿は見えないので、心身の全てを声に込めて楽しく録音しました。井原さんの著書は今年 12 月に刊行予定。サイトの録音を聴く方が増えて本が売れ、舞台朗読も楽しめる観客層が広がれば幸いです。

○ *World Cafe(2019/7/21 開催)のレビューと今後に向けて*

ファシリテーター　桧山　渉

2019 年 7 月 21 日、メルマガ「まちづくりひろしま」7 周年記念シンポジウム『被爆 100 年の広島をどう描き、どう実現するか』が開催され、その第 3 部で、World Cafe 風グループ討議が行われた。あまり馴染みのないイベントだったにもかかわらず、第 1 部の基調講演、第 2 部のパネルディスカッションの参加者も含め、30 名弱の人に参加いただき、熱のこもった討議が行われた。**World Cafe とは、「知識や知恵は、機能的な会議室の中で生まれるのではなく、人々がオープンに会話を行い、自由にネットワークを築くことのできる『カフェ』のような空間でこそ創発される」という考えに基づいた話し合いの手法**である。ファシリテーター役の自分も含め、主催者、ホスト共に初めての経験で不慣れな点もあったが、第一回目としては、まずまずの出来だったのではないだろうか。

先日 10 月 9 日、第 1 回 World Cafe のチェック（評価）と第 2 回目の開催に向けて、主催者、ファシリテーター、ホスト 5 人による話し合いが行われた。以下にその概要について整理する。

「何のために World Cafe を行っていくのか」

ホスト 5 人から出た共通の意見である。イベント参加者のアンケートの内容を見ても、World Cafe については、“いろいろな意見が聞けて良かった”、“講演を聞くだけでなく、その後に話ができたことが良かった”など、おおむね好評価であった。全体的な印象としては、ホスト 5 人も同様であったが、次回の World Cafe の開催に向けては、“World Cafe を続けていくことによって目指すものが何になるのか”、“最終目的をはっきりさせる必要がある”、という声が強くあがった。その主な理由としては、“目的がはっきりしないと参加する人の単なる余暇活動としてのイベントになってしまう可能性が高いのではないか“、“目的を明確にしないと若い世代（学生等）の参加者を募りにくいのではないか”、“継続的活動のためにも明確な目的が必要なのではないか”、などである。

活動の根底にある目的は、今回の World Cafe のテーマでもあった、**『これからの広島のまちづくりを考える（平和都市広島とはなにか）』**で一致している。それを踏まえ様々な意見を交換する中で、我々が World Cafe を行っていく目的は**『ひろしまのまちづくりに対して、まちの人が行政側の人と、対話しながらまちづくりが進められるような状態にしていく、そのためのムーブメントをつくりだす』**、**『行政側の人が、まちの人の意見を聞きたい場合には、ここにくればいい、というような場にしていく』**という 2 点に概ね整理された。ただし、その目的に向かっていくためには、**行政側の人も納得するような実績を重ねていくこと**、そして、**まちの人が World Cafe に参加したい、関わりたいと思うような内容にしていくこと**、さらに **World Cafe を開催する側も、おもしろいと思うような内容にしていくこと**、などを検討・実行していかなければならない。

そこで、まず実績を重ねていくために何から始めるか、ということに対して、**【“場所（まち）を知る”イベントを実施して World Cafe を開催する】**のはどうか、という意見があがった。これは、小さなエリア単位で、ひろしまのまちの部分をよく知っていこうというものである。その場所や地域に詳しい専門家や団体にレクチャーしてもらい、その後に参加者で World Cafe を行う。これを、徐々にひろしまのまち全体で網羅していこうというものである。皆、おもしろさを感じているようで、イベント場所の説明動画の作成や、VR の作成など、World Cafe からの展開の意見も多かった。

この活動の利点としては、**ひろしまのまちを詳しく知るようになること（専門家の情報や知見を共有すること）**、また、**活動を実施した場所を地図上でチェックしていくことで、実績が視覚的に確認できること**、そして、**その場所や地域に詳しい専門家や団体とのネットワークが広がること**、などがあげられる。

上記以外にも様々な意見があがったが、概ね次回開催に向けてどうしていくかということに対して、積極的な意見が各位から出された。これは、第一回の開催にある種の手ごたえがあり、次も開催したいという想いがあるからだと個人的に感じている。

最後に、World Cafe を開催していくうえで、その団体名称を決めたほうがいいのではないかという意見があがった。これについては、現在、各位が検討中である。今後決まった名称が、徐々に知られていくように活動を継続していきたい。

現在、第 2 回の World Cafe の開催テーマを**「平和大通り（別名：１００m 道路）」**で検討している。

＊出席者：石原悠一、片島蘭、高橋幸子、築島渉、松波静香、進行：桧山渉　（敬称略）

○「時代を語り建築を語る会（第２６回)」報告
語り人：千代章一郎氏（島根大学教授）

～ル・コルビュジエの世界観・建築観を語る～

近代建築の巨匠の一人ル・コルビュジエを研究して日本建築学会賞を受賞された論文を踏まえ、巨匠の建築観を学ぶことができた。

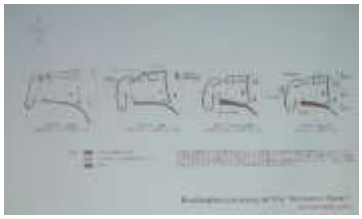
主催：時代を語り建築を語る会実行委員会（代表：石丸紀興）
日時：2019 年 9 月 28 日（土）15:30～18:30
場所：合人社ウェンディひと・まちプラザ

略歴：1968 年生まれ。東京理科大学卒後、1998 年京都大学大学院博士課程修了。1999 年広島大学助教授。2007 年同大学准教授。 2019 年島根大学教授。著書に「ル・コルビュジエの宗教建築と建築的景観の生成」ほか。

☆ ル・コルビュジエ研究のきっかけ

・大学院の修士課程の時に実体ではなく思想としての建築に関心を持ち、アンビルドの建築を研究。博士課程の時に主任教授からコルビュジエ設計のラ・トゥーレット修道院の図面整理の機会を与えられる。
・コルビュジエは図面を書きながら考えをまとめていくタイプの建築家で、設計に取り組む姿勢に共感。図面の中の一本の線やスケッチやメモを自分なりに解釈しながら図面の変遷を読み解く面白さを覚える。

☆ 一例としてロンシャン礼拝堂の設計過程



・右図は左から右に設計の過程を示している。初期の計画図は直線的だったが、段々と曲面をつけて壁厚に変化を持たせ、最後は予算の関係で全体を縮小している。
・コルビュジエのイメージ・スケッチをベースにスタッフが図面化。模型を作りながら壁や屋根の曲面を検討。
・それまでの幾何学的な建物から脱皮し、丘の上に建つ造形的な建物として風景に調和。

☆ ル・コルビュジエの近代建築の考え方

・近代建築の流れは工業化を進めたドイツのバウハウス派とフランク・ロイド・ライトに代表されるアメリカ派とフランスのコルビュジエ派に分けられる。
・その土地固有の建築とそれを標準化してどこにでも建てられるようにしたいという考え方が共存。世界的に広まったピロティや屋上庭園などの「近代建築の 5 原則」や継続的に増えていく美術品の収容に対応した「渦巻き状の美術館」などの構想はその典型。
・近代建築の 5 原則の代表作として初期のサヴォア邸が有名だが、後期のラ・トゥーレット修道院がその集大成といえる。

☆ 都市の考え方

・初期の「輝く都市」構想は健康を第一と考え、人間的な都市を目指す。建物を高層化してオープンスペースを生み、そこに緑。西洋の都市は戦争の装置として生まれ、中心は宗教建築。第二次世界大戦で街が破壊され、復興の際に都市のコアの在り方が問われる。コルビュジエは都市のコアとして市民に親しまれる芸術空間、スポーツ施設を推奨。丹下健三も広島中央公園構想案においてその思想を受け継ぎ、独自に子供空間を加え、「平和の工場」を標榜。

☆ 住宅の考え方

・建築から都市に関心が広がったと同様に、著書「建築を目指して」では建築の始まりは何かを追求し、住宅の原型としての最小限住宅を提案。「住宅は住むための機械である」と主張する一方、住宅で一番必要なのは孤独と静寂と言っており、集合住宅では遮音性と通気性を大事にしている。台所や浴室など水回りにはブルー系の落ち着いたトップライトを設置。
・住宅の装置としての家具の設計にも興味を示し、対象は寝台列車の客室や飛行機の機内の装置にまで広がる。身体の延長として徐々に関心が転化していくのがコルビュジエの特徴。

☆ エピソードなど

・国立西洋美術館の打合せのため来日時に京都に行き、桂離宮の卍亭を見て「壁がないから、建築ではない」とコメント。京都の先斗町界隈が気に入り、アメリカの都市批評家ジェイコブズ女史も大好きそうな都市の多様性をほめて熱心にスケッチ。
・コルビュジエが計画したチャンディガールは無機質なビルが林立しているように見えるが、3 日過ごすと界隈性がよくわかる。

（編集委員　瀧口信二）

街角ウォッチング

過去と未来をつなぐふたつのイベント

技術士　片平　靖

９月にふたつのイベントがあった。

一つは９月７日、８日に紙屋町シャレオの中央広場で開催された「街にみどりを　くらしに花を」をテーマにしたイベントである。広島花きイノベーション事業推進協議会（和田由里会長）が農林水産省の補助を受け開催した。屋外だけでなく、屋内の緑化を進める最新技術を紹介するセミナーやフラワーアレンジメント、コケ玉の作り方などのワークショップもあった。会場には県産の花や屋内での新しい緑化のアイテムも飾っており、また、松井広島市長やサンフレッチェ広島の森崎兄弟など著名人の生け花も展示され、華やいだ雰囲気の会場は多くの人で賑わった。また、来年春に旧市民球場跡地で開催される全国都市緑化ひろしまフェア「ひろしま　はなのわ 2020」のＰＲのため、ゆるキャラ「めーでるちゃん」や三原の「やっさだるマン」も駆けつけて開催機運を盛り上げた。この催しは会長である㈱花満の和田相談役から、私がシャレオに勤めている時に中央広場での実施を相談されたイベントで、無事開催されほっとしたところである。

会場の様子 (9/7)

「はなのわ」ＰＲ

被爆により焼け野原となった広島が緑豊かな街に復興を遂げたのは、1957 年からの供木運動などの第一次緑化運動から今に続く先人達の努力の成果である。復興の歴史を引き継ぎ、将来に向けて一層街や暮らしに緑や花を展開していくイベントが被爆 75 年目の春の「はなのわ」である。

もう一つのイベントは、９月 15 日に実施された「時代行列・入城行列」である。浅野氏入城 400 年記念事業のメイン事業で、朝８時から柳橋公園に武士や町人に扮した約 150 名がぞくぞく集結し、10 時の出発式の掛け声とともに、仏だん通り、本通へと進んでいった。そのうち 100 名は平和記念公園へ向かい、行列の主役である浅野長晟（深山商工会議所会頭）や家老、武将の一行 50 名はシャレオを経由し、基町クレド広場での記念イベントを行い、広島城へ向かった。二の丸へ入る表御門は閉じられ、入城行列によって開けられて、本丸下段に無事着いた。式典の最後に入城を記念し「エイエイオー」の雄たけびで終了した。私はまちなか西国街道推進協議会の一員として、長晟一行の傍らで行列の誘導警備役として同行した。熱い（暑い）一日であった。

行列の様子

到着後の記念写真

当時の長晟の入城はこれほど絢爛豪華ではなかったと思うが、400 年の時を経て甦った時代行列・入城行列は、広島の歴史と文化の原点がここにあることを、市民をはじめご覧いただいた方に印象強く残ったのではないかと思う。

広島の過去と現在、未来につながるふたつのイベントであった。

○ 広島市中央公園を考える⑪　日本建築家協会広島地域会まちづくり委員会の提案

これまで過去に中央公園のあり方について提案された内容を整理し、分析している。今回は、同広島地域会のまちづくり委員会が２０１３年３月に広島市長に提出した「ひろしまのグランドデザイン」を紹介する。

平和記念公園と中央公園一帯は国際・平和・文化都市ひろしまを象徴

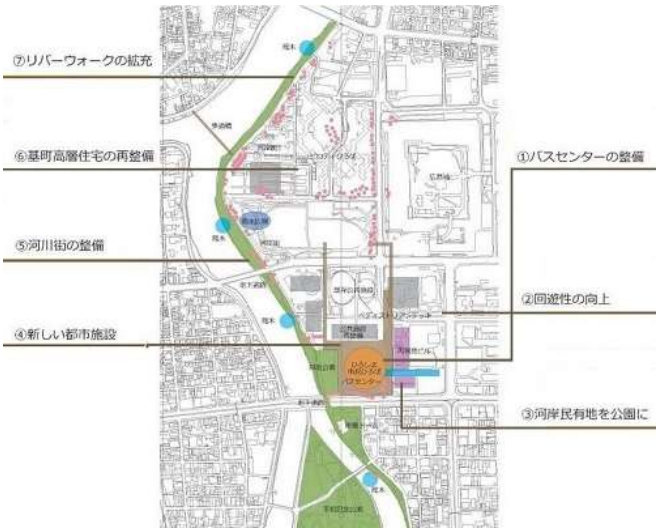
2011 年に広島市中央公園アイデアコンペを終え、地元の建築家として何か提案しなければという思いから、同広島地域会のまちづくり委員会で検討し、ひろしまのグランドデザイン「ひろしま市民ひろば」をまとめた。

被爆 100 年を目標年とし、広島のコア地域の長期的かつ広範囲にわたる計画なので、ひろしまの将来像、地域性などを見据えた総合的なグランドデザインが不可欠である。

１ 基本理念

広島のまちづくりの憲法ともいえる広島平和記念都市建設法の精神に基づき、平和記念公園から中央公園一帯が国際・平和・文化都市ひろしまを象徴する空間となるよう未来に向けて発展させる。

２ 提案



＊ひろしま市民ひろば　旧球場跡地は原爆ドームに対峙し、平和記念公園と中央公園の鼎に位置。様々な用途に利用できる可変性のある空間であると共に世界遺産のバッファゾーンとして品格のある雰囲気と都市的な賑わいのバランスの取れた空間。その周囲に広島の歴史や日本文化に触れ、来訪者が互いの国の理解を深め合える国際文化交流施設を配置。

＊リバーウォーク　元安川及び環境護岸と緑道により平和記念公園、原爆ドーム、中央公園はつながっている。ひろしま市民ひろばと環境護岸を一体化させ、緑道のリバーウォークと雁木を利用した水上交通を拡充。中央公園側に公的な貸店舗を適宜配置し、親水広場や川の駅などと相まって賑わいのある河岸街を形成。

＊回遊性　東西の幹線道路で分断された南北の動線を立体交差により解消し、ひろしま市民ひろばを中心とした歩行者用ネットワークを形成。周辺の電車、ＪＲ、アストラムラインの最寄り駅とのアクセスを改善し、まち全体の回遊性を向上させる。

＊再開発ビル　商工会議所ビルなどの河岸沿いの建物を移転させるため、東に隣接するＮＴＴ所有地の一角を再開発。再開発ビルはＮＴＴ、商工会議所、バスセンターなどが入居し、ひろしま市民ひろばに開かれたプランニング。バスセンターは２階にバス乗り入れを想定。

＊公共建築の適正再配置　老朽化した市の建物は新たなニーズに対応したメディア、文化、科学、国際、こどもの施設に再編し、国際文化交流機能を加味しながら適正再配置。計画的かつ段階的に整備。

＊基町高層住宅の再整備　中層住宅は順次解体して公園に戻す。高層住宅は耐用年数までは残すとして、管理運営などのソフト面を工夫し、宿泊施設や事務所・店舗など柔軟に用途変更可能なシステムとする。地上部のピロティと屋上庭園は設計当初の意図を尊重し、バザールや展望レストランなど市民に開かれた空間とする。

＊管理運営体制　ひろしま市民ひろばと中央公園のオープンスペースの管理運営は、ひろしま市民の協働の場として自立し、多様な変化に対応できる体制を整える。

（以上は**日本建築家協会広島地域会まちづくり委員会の提案**の概要）

＜コメント＞

・現在、中央公園の自由・芝生広場に新サッカー場建設計画が進められ、並行して旧市民球場跡地と中央公園全体のビジョンの見直しがなされている。

一方、商工会議所は市営基町駐車場周辺地区への移転が取り沙汰され、更に球場跡地の東側に隣接するＮＴＴ、そごう、バスセンター等による「基町・紙屋町エリア将来像研究会」もスタートしている。周辺も含めたこのエリア全体の整合性の取れた計画が望まれる。

・この提案は、中央公園に面したＮＴＴエリア一角の再開発を商工会議所とバスセンターの移転や中央公園内の公共施設の再編とリンクさせ、中央公園と一体のものとしている。国の都市再生緊急整備地域に指定された紙屋町・八丁堀地区内であり、民間開発を支援する市の施策を先取りした提案である。

・基町高層住宅も２戸を１戸にしたり住戸改善に努めているが、経年劣化は避けられない。都心の公園計画の一角に公営住宅があることに時代の要請があったことは分かるが、その役割が終えたときには方向転換しなければいけない。

住宅から宿泊施設や店舗など、使い方を大胆にフレキシブルに変えていくべきと思う。

・基町中層住宅も県営は解体済みであり、市営の方も解体すれば５ｈａ以上のスペースが生まれる。サッカー場も自由・芝生広場に無理やり収めるのではなく、こちらの方がよほど適地と考える。

（編集委員　瀧口信二）

○ 本「平和の栖（すみか）」紹介　著者：弓狩　匡純(ゆがり・まさずみ)

ご存知だろうか、あの法律のことを――。

広島市には、長い名称の独自の法律が一つある。広島市民にとって、決して忘れてはならない法律。それを広島平和記念都市建設法という。この十一文字を分けてみる。広島、平和、記念、都市、建設法。見ているだけで様々な感慨が立ち上ってくる。

戦後、間無しの頃、誰しも「生きる」ために精一杯だった。平和、未来などに心を寄せる人は殆どいなかった。広島しかり、日本国中しかりである。

しかし、原爆で潰滅した広島を「平和の原点」と考えていた人たちがいた。本書で「さむらい」と称された人物がそう。当時の広島市長・浜井信三、市会議長を務めた任都栗（にとぐり）司、そして法案を書いた参議院議事部長の寺光忠などである。彼らの揺るぎなき情熱が、前例のない重い扉をこじ開け、やっと制定されたのが同法である。

だが、生みの苦しみは並大抵ではなかった。国会に提出する議案は、絶対の権限を握っていたＧＨＱ国会議事課の事前検閲と承認が必要。彼らを納得させるには、相応の包囲網を張り巡らせねばならない。想像以上の難儀が絶えずつき纏（まと）っていた。

まして、戦災都市は広島だけではない。広島市だけを何とかする法律となれば、尚更のことハードルは高い。財政的処置、既存の法律との兼ね合い、踏絵は幾つも用意されていた。

広島のために、未来の人類のために――、さむらいたちは、苦慮、苦渋、惨憺（さんたん）を舐（な）めながら、思考は凝縮される。「単なる復興の概念を超え、次元の高い理念で広島再建を目指すしかない」と。

寺光忠によって、第一稿が起草された。迸（ほとばし）る心情が滾（たぎ）り、火傷（やけど）しそうなほど熱い。だが、これでは一般的な法律文書に遠い。目指すのは陳情ではなく制定である。法律としての体裁、しきたりに従い、字句の修正、表現の加減筆、かつ、広島の心を基軸に練りに練られていく。

夜を徹した格闘であった。心血を注いだ作業であった。ほぼ一カ月、脳裏を離れることはなかった。

前文ほか僅か七箇条の条文には「恒久の平和」「国際平和」など、今のわれわれが当たり前に使う語句が盛り込まれていく。ここに、平和の理念、広島の成すべきことの意識が、市民の中にもうっすらと姿を現し始めていく。

同法の施行後、七十年が経過している。広島は復興した。広島は蘇った。だが、平和は何処にあるのか。誰一人言い切れぬ。断絶と失望を繰り返して世界は喘（あえ）いでいる。

著者・弓狩氏は、本書のタイトルに平和の栖を用いている。栖とは、どこにあるのか。言うまでもない、広島である。広島こそ、平和の栖にしなければならないと説き、道行をこうも示唆している。「負の遺産」から「正の遺産」へ進むべきと。

彼は、広島と殊更縁のある人物ではない。東日本大震災の惨禍に接し、人々の悲愴な叫びに心を突き動かされ、表現者としての本分を問うたのが本書。自身も心の平和の栖を求めてのことであろうか。

改めて記す。崇高な理念で作成された、広島平和記念都市建設法。

平和は脆（もろ）い。手を拱（こまぬ）けば指の隙間から、ポロポロ零（こぼ）れていく。覚束（おぼつか）ない仮初めの現状を有り難がり、見つめるだけでは、平和の栖は築けない。

＊個人の敬称略　（編集委員　通谷　章）

注）定価：2.500 円＋税、発行人：集英社クリエイティブ、発行：2019 年 7 月 5 日

○ *読者からの投稿*

映画「ひろしま」のご紹介

フリーパーソナリティ　三浦ひろみ

「ひろしま」という映画を知っていますか？と聞くと、平和に関して意識の高い方でも知らない方が多く、知っていても「古い映画でしょ？」と、もう過去の映画と捉えている方もいらっしゃいました。しかし、古いゆえに無二の価値を持つ映画でもあります。

1953 年（昭和 28 年）、原爆が投下されてまだ８年後の作品で、日教組プロが製作、約 9 万人近い広島市民（被ばく者の方々も含む）がエキストラなどで参加、当時の広島の町並みなども見ることができるとても貴重な作品です。

映画「ひろしま」は長田新氏が編纂した文集『原爆の子～広島の少年少女のうったえ』を元に脚色したもので、当時の人々の暮らし、そして何よりも投下直後の有様が実に生々しく撮られいるのです。関川秀雄監督（「きけ、わだつみの声」）は広島に原爆が投下された直後の映像化のために、百数カットに及ぶ撮影を費やして、克明に阿鼻叫喚の原爆被災現場における救援所や太田川の惨状などを再現。広島一中の教師と生徒が逃れた川の中で校歌「鯉城の夕」を歌い励まし合うシーンなど胸に迫ります。さらに、被爆者のその後の苦しみや、原爆孤児となった人々の苦しみも描き、まさに原爆がどういうものなのかが強烈に伝わる作品となっています。

演じる役者さんたちも素晴らしい。月丘夢路さんは広島市大手町出身でもあり、当時専属であった映画会社を説得し無償での出演。他にも、岡田英次（「ヒロシマ・モナムール」）、山田五十鈴、加藤嘉など演技派の役者たちが迫真の演技を見せています。ベルリン国際映画祭では長編映画賞を受賞！海外でも高く評価されました。

しかし、配給会社は「反米的な」シーンがあることを理由に全国上映を拒否。小規模での上映後、やがて幻の映画となっていたところ、本作の監督補佐を務めた小林大平の子息である小林一平氏が「人類の至宝。多くの人に見てほしい」と、2008 年から“反戦・反核・平和”への願いを込めて全国で上映活動を続けられていましたが、2015 年に急逝。以後その遺志を息子の小林開氏が引き継いでいらっしゃいます。現在は映画に感銘を受けた米の映画専門チャンネル FILM STRUCK EXTRAS のプロデューサーのチャールズ・タベシュ氏によりデジタル化資金が提供され、英語字幕付きのものもあります。

かの映画監督オリバー・ストーンも「*優れた映画であり、優れたストーリーであり詩的だ。そして、現代戦争の真の恐ろしさを思い出させてくれる映画だ。記憶は常に忘却との闘いだ。常に人は思い出したくないものには背を向ける。だから、この素晴らしい映画を見て欲しい。あらゆる人に、全世界の人に！*」と、今年８月に NHK の E テレ放送の ETV 特集「忘れられた『ひろしま』～8 万 8 千人が演じた“あの日”」で語っています。

今後、もっと日本の人々、特に広島の人々に見ていただきたいと思います。
注）ＤＶＤも市販されているし、レンタルビデオも可能。八丁座では来年夏も上映予定。

□ 編集後記

総合計画とは、まちの様々な分野の政策を総合的かつ計画的に推進するための基本的方向を定めるものであり、まちづくりの１丁目１番地である。広島市では、現在の第５次基本計画の計画期間が 2020 年度で満了するため、2030 年を目標としてまちづくりの根幹となる基本構想、基本計画及び実施計画の見直しを進めている。

都市像として広島平和記念都市建設法をもとに「国際平和文化都市」を継続し、平和を実現することの重要性を国際社会に向けて発信し続けるとともに、市民の誰もが平和の尊さを実感できる豊かな文化と人間性を育む都市づくりを着実に進めていくとするこれまでの内容を踏襲

している。

一方、基本計画では、地球環境の抱える課題や世界の枠組の変化、また社会経済の変化に対応して、**持続可能な開発目標**(SDGa-Sustainable Development Goals)を「国際平和文化都市」の具体化に向けた施策目標とし、着実な達成を目指すことを提案している。そのためにこれまでの政策を洗い直し、新しく構築する必要が生じている。

この基本構想、基本計画が単に計画策定に留まらないとすれば、現在推進されている多くのプロジェクトのあり方をもう一度見直すことになってくる。

（編集委員　前岡智之）

○お知らせ：「時代を語り建築を語る会(第２７回)」開催

・語り人：中井智司氏（広島大学大学院・化学工学教授）
・テーマ：マイクロ・プラスチック問題を語る
―その危険性と対策の必要性・可能性（仮題）
・開催日：２０１９年１１月２２日（金）１８：３０～２０：３０
・会　場：合人社ウェンディひと・まちプラザ　研修室Ａ（北棟５階）
（旧広島市まちづくり市民交流プラザ）
・会　費：１０００円（資料費・会場費）、学生・院生は無料
・参加申込：広島諸事・地域再生研究所
電話/FAX：082-223-7226 メール：nisimar5@hotmail.com
・主　催：時代を語り建築を語る会実行委員会（代表　石丸紀興）

＊メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！

（投稿は５００字程度でお願いします）

編集委員

石丸紀興　広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視　心豊かな家庭環境をつくる広島２１理事
瀧口信二　広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷　章　ガリバープロダクツ代表
前岡智之　中国セントラルコンサルタント代表